

ナシヨナリズムと文化 (2)

ルドルフ・ロツカー

大沢正道訳

すべての支配体制と古代の王統は、その起源を神に淵源するとしていたが、やがてその後継者たちは、支配者が神の出であるという臣民の信仰こそ、あらゆる種類の権力にとって一つの不動の基礎であることを理解するに至った。神の怖れはつねに自発的な服従によって、精神的な準備行動であった。これだけには必要であった。それはその表面がなんであれ、すべての圧制の永遠の基礎をなしていた。自発的な服従を強制することはできない。ただ支配者の神性への信仰のみがそれを作りだすのである。それ故人民のうちにこの信仰を覚醒させ、それを心構えとすることがこれまでのすべての政治の第一目的であった。宗教は歴史に広くみられる原理である。それは精神を拘束し、彼の思想を一定の形に閉じこめる。その結果彼は習慣的に伝統的なものの継続を喜び、どんな革新にも危惧の念をもって反対するようになる。人間があるがままの古い事物に縛りつけておくものは、底知れぬ深淵に落下してゆく内的な恐怖である。絶対権力の原理の徹底した代表者ルイ・ド・ボナールは、彼が次のように書いた時、宗教と政治の間のつながりを非常によく理解してい

た。「神は万物を統べる至上の権力である。神人は全人類を統べる権力である。国家の首長は臣民を統べる権力である。家長は彼自身の家の権力である。しかしすべての権力が神の姿のうちに作られ、神に淵源しているのだから、すべての権力は絶対である。」

すべての権力は神にその根を持つており、すべての支配はその深奥の本質において神聖である。モーゼは神の手から直接に戒律を受取った。その最初の言葉に曰く「私は主であり、汝の神である。主を除いていかなる神も信するなかれ」そしてそれは主と人民との間の契約であった。ハムラビの法典が記録され、数千年の後にバビロニアの王の名を告げた有名な石は、太陽神チャマシユの面前に立つハムラビを示している。法の発布を告げる前文は次のように書き始められている。

「至高なる者、アヌナキの王アヌ及び世界の運命を司る天と地の神ベルが、人類すべてをエアの第一の子、聖なる法の神マルドゥクに委ねた時に、彼らは彼をイギギにおける偉大なるものとした。パピロンにて彼らは彼のいや高き名を宣した。その名は彼らが彼に彼

の王国として授けたすべての土地に涉って賞讃され、天と地の如く永遠であった。アヌとベルが人間の体を嘉みせられた後、彼らは朕、輝しき支配者にして神を怖れるハムラビを召し、朕が地上に正義を布き、邪悪なもの、無慈悲なものを滅し、強きをくじき、弱きを助け、黒髪の人間の運命を太陽神のごとく司り、国土を豊かにせよと命ぜられた。」

強大な僧侶階級の影響を受けて、宗教的な礼拝がすべての社会制度に涉って一つの力となっていたエジプトでは、支配者の神化が全く奇怪な形を呈していた。ファラオもしくは僧王は地上における神の代表であるだけでなく、彼自身もまた神であり、神に似た尊崇を受けていた。すでに第六王朝の第一年に、王は太陽神の息子ラー（日神）とみなされていた。彼の時代に大ピラミッドが建てられたチュフ（チエオプス）は自分のことを「ホルス（日神）の化身」と称していた。イブリムの納骨室の彫刻でアーメンホテプ三世は群神のなかの一人として描かれている。彼はまたソレブに寺院を建てたが、その寺院には彼自身が祀られていた。彼の後継者アーメンホテプ四世は後にエジプトで他の神々の崇拜を禁じ、国家宗教の尊厳のために王の人格のうちに生きている日輪神アトンの礼拝を奨励したが、それは疑いもなく政治的な動機に動かされていた。信仰の統一はファラオたちの手中に地上の権力を集中するための近道となっていた。

古代インドのマヌ法典に次の章句がある。

「神は創造を保護するために王を作った。この目的で神はインドラ、風、ヤーマ、太陽、火、天、月及び創造の神からその一部分を取った。このようにして王は神々のうちの神の部分から作られたの

で、彼の光輝は他の創造されたものの輝かしさを凌ぎ、太陽のように眼と心を眩ませ、何人も彼の顔を仰ぐことができなかった。彼は火であり、空気であり、太陽であり、月である。彼は正義の神であり、富の守護神、洪水の主宰者、天空の命令者である。」

エジプトとチベットを除いて、どの国でも組織化された僧侶階級がインドのような権勢を持っているところはなかった。それは巨大な大陸のすべての社会進化にその影響を及し、全住民を狡猾にも各階級に分割することによって、すべての事物を鉄の規則のなかに押込んだ。それはそれらが信仰の伝統に根ざしていたからこそ耐えられたのである。ごく初期にバラモンは武人階級と協定を結び、インド人民の支配権を分け合った。その場合、僧侶階級は彼らの手中に実権があるかどうかをつねに注意しており、王は彼らの欲望の道具でしかなかった。僧侶と武人はいずれも神の出とされた。つまりバラモンはブラフマの頭から生まれ、武人はブラフマの胸から生まれたのである。両者は同じ目的を持ち、法律は次のように定めていた。「両階級は一致して行動しなくてはならない。なぜならいずれも他なくしては行動しえないのであるから。」こうして帝王と教皇政治主義が起った。宗教的と政治的との権力欲は、ここにその十分な表現を見出している。

古代ペルシャにおいても、支配者は神の生きながらの化身であった。彼が町に入る時には白い外衣をつけたマギ（僧侶階級）の出入迎えを受け、宗教的な頌歌が合唱された。彼の歩む道にはミルトスの枝やバラの花が撒き散らされ、片側には香のけむる銀の祭壇が立っていた。古代ペルシャの聖典『ゼンド・アベスタ』が述べているように、彼の権力は無制限であり、彼の意志は最高の法であり、彼の

命令は至上であった。ただ稀な時に、彼は人民の前に姿を現した。彼が現れる時にすべてのものは地面に平伏し、顔を隠さなくてはならなかった。

ペルシャにもまた階級制度があった。ペルシャの組織された僧侶階級は、インドのそれほど全能な力をもたなかったが、しかしその国で第一の階級であり、その代表者たちは王のもっとも側近の顧問官として、つねに彼らの影響力を伸す機会を持ち、ある程度その領土の動向を左右していた。社会秩序のなかで僧侶の果たす役割について、『ゼンド・アベスタ』の一章は次のように語っている。

「汝の好む仕事は木の葉、雨の滴、天の星、海浜の砂よりも多くあるが、もしそれがデストゥル（僧侶）の嘉すところとならなければ、それは汝に益きないであろう。救済の道へのこの導き手の欲をうるために、汝は汝のもつすべて、汝の商品、汝の土地、汝の金の十分の一を、喜んで彼に捧げねばならぬ。もし汝がデストゥルを満足させるなら、汝の靈魂は地獄の苛責を免れ、汝はこの世で平和を、あの世で幸福を見出すであろう。なぜならデストゥルは宗教の師であり、すべてを知り、全人類に赦罪を施すからである。」

中国人が天界の最初の支配者と呼び、彼らの年代記によると、いまから約二十八世紀前に生きていたといわれる伏羲は、中国の神話では超自然的存在として尊ばれ、彼らの絵では普通、魚の尾のついた人間となっている。それはギリシャ神話のトリトンのようにみえる。伝承によると彼は中国人民の真の覚醒者とされている。彼が現れる以前、彼らは動物の群のように孤立した野蛮状態のなかで生活していたが、彼によってその基礎を家族と祖先崇拜におく社会秩序への道が示されたのである。その時以来中原で覇を競った各王朝

は、みな神の出とされた。皇帝は自ら「天子」と称した。中国では一度も僧侶階級は組織されず、祭式の実施は国家宗教の場合には、最高の官廷官吏の手で行われた。しかし彼らは中国社会の上層階級に影響を与えただけであった。

日本でミカド、「高い門」は、太陽の女神アマテラスの子孫とみなされている。アマテラスは日本で最高の神として崇拜されている。彼女は支配者の人格を通して彼女の意志を知らしめ、彼の名において人民を統治する。ミカドは神の生きながらの化身であり、それ故彼の宮殿は「ミヤ」、魂の社と呼ばれる。武士階級の指導者が数百年実権を握り、ミカドはただの飾り物的役割しか果たしていなかった時でさえ、彼の人格の神聖はけがされることがなかった。

同じように強力なインカ帝国の基礎も、伝承によると神の仕業となっている。この国の不分明な歴史は今日の研究家に多くの問題を提起している。マンコ・カパクが妻のオクロ・ファコとともに、ある日クスコ高原の郷土に現れ、自ら土地の人々にインティ・パチュリ、太陽の子であることを示し、彼らに彼が彼らの王であることを告げた、と伝承は詳しく語っている。彼は彼らに耕作を教え、多くの有用な知識を与えた。その結果偉大な文化は創造されたのである。

チベットでは権力欲に駆られる僧侶階級の強い影響の下に、一風変わった教会国家が起った。その内部の組織はローマの教皇政治と不思議なほど似通っている。ローマ教会のように、それは口頭の告白、祈禱、香炉、遺物の礼拝、僧侶の剃髪を行う。国家の長にはダライラマとボグドラマ、あるいはパンチェンリンポチュが並び立っている。前者は神聖な仏教の開祖釈尊の化身とみなされ、後者はラ

マ教の偉大な改革者ツォン・カバの生きながらの人格化とされている。彼にはダライラマと同じように、聖なる名譽が授けられ、それは彼の排泄物にまで及んでいる。

その大戦争と征服が世界の半ばを恐怖に陥し、モンゴルの強大な支配者ジンギスカンは、公然と宗教を彼の権力政策の道具に使った。もっとも彼自身は明らかに「啓蒙的専制君主」の部類に属していた。彼の種族は彼を太陽の子孫とみなしていたが、ドニエプル河から中国沿岸に及ぶ膨大な領土には、幾つもの宗教的信条を持つ人民が住んでいたため、彼自身の種族と同じく臣従した諸種族を支配してゆくには、僧侶の力を借りるよりほかはない、と賢くも彼は直観した。太陽の子孫であるだけでは十分でなかった。彼の領土には何百万のネストリア派キリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒、儒教徒、ユダヤ教徒が住んでいた。彼は各派の宗教儀式の最高の僧侶でなければならなかった。彼は北部アジアのシャーマン教徒とともに、魔術を修め、火に投じた羊の肩胛骨のひびが語る神託に問うた。日曜に彼はミサへ行き、ぶどう酒をもって聖餐拝受を祝い、キリスト教の司祭と問答した。安息日（土曜）には彼はユダヤ教の会堂へ行き、自らチャハンとして、コヘンとして振舞った。金曜日は彼はシラミルク（女人禁制の部屋）にこもり、後のコンスタンチノーブルのトルコ皇帝同様、よき教主となった。しかし彼はむしろ仏教徒であった。彼はラマ教徒と説教し、自らをサチャのグラン・ド・ラマと呼ぶよう要求した。というのは彼は彼の領土の中心を、北部アジアの仏教徒の領土に移そうと考えていたためで、そのために仏教を国家宗教とする大規模な計画を樹てていた。¹⁾また歴史が彼を「大王」と名づけるマケドニアのアレクサンドロ

スも、ずっと後のジンギスカンと同じ推定の下に行動し、明らかに同じ動機によって鼓舞されはしなかったか。彼は世界を征服し、流血をもつて統一した時に、このような事業を暴力だけで永久に維持することはできない、と感じたに相違ない。そこで彼は彼の統治を被支配民族の宗教的な信仰に結びつけようと試みた。「ギリシヤ人」の彼はメンフィスの殿堂でエジプトの神々のために犠牲を捧げ、彼の軍隊を率いてリビヤの熱砂を越え、シヴァの沃土でゼウス・アモンの神託に諮った。盲従的な僧侶は彼を「大神」の息子として歓迎し、彼に神聖な榮譽を捧げた。こうしてアレクサンドロスは神となり、ゼウス・アモンの子孫としてダリウスに対する第二の戦役の折に、ペルシヤ人の前に現れた。ペルシヤの王すらこれほどにはなしえなかった、マケドニア人による膨大な帝国の完全な臣従はこのようにして果されたのである。

アレクサンドロスはこの手段を彼の政策の道具にしただけではなかった。彼は次第に神憑りの思想にかぶれ、臣従した諸国民だけではなく、彼の同胞にまで神格を要求した。しかし彼らは彼がフィリップの息子にすぎないことを知っているので、このような礼拝は不可解でしかなかった。この些細な対立は彼を狂気させ、しばしば忌み嫌われた犯罪へと追込んだ。軍事上の成功で勢づけられた権力拡張への彼の貧乏な欲望は、彼の自己評価の限界を突破し、すべての現実に対して彼を盲目にした。彼は彼の宮廷にペルシヤ王の儀礼を取入れた。それは強力な専制君主の意志への、全人類の完全な臣従を象徴していた。事実、野蛮な圧制の誇大妄想は、「ギリシヤ人」である彼のうちにもっともありのままの表現を見出していた。

アレクサンドロスはヨーロッパに帝王政治主義と、王の神聖とい

う観念を移植した最初の一人であった。それまでそれはただアジアの土壌にのみ繁栄していた。そこでは国家は少しの障害もなく発展し、宗教と政治はもつとも初期の段階に到達していた。けれどもこの事実から、民族の特殊性に問題があると結論してはならない。その後帝王政治主義がヨーロッパで占めた優位こそ、宗教的崇拜の本能の特殊な型が、類似した環境の下ではすべての民族、国民の間に現れることを明白に物語っている。もつともその外的な形体がその社会環境の条件に拘束されることは否定できない。

ローマ人が帝王政治主義を取上げ、他の国では最初ほとんどみられなかったような形にそれを発展させたのも、東洋に由来している。ジュリアス・シーザーがローマの独裁者になった時、彼は彼の権力を人民の宗教的観念に結びつけようと試みた。彼は彼の家系を神の出と取繕い、先祖はヴィナスだと主張した。彼の努力はことごとく彼をその領地の無制限な支配者に仕立て、一般人民とは内的なむすびつきをもたない生き神にすることに注がれた。彼の像は七人のローマの王のなかに建てられ、彼の追従者たちはローマ権力を窺うパルティア人を征服するために、彼をローマの唯一の支配者にせよ、との神託が下ったという噂をばら撒いた。彼の肖像は「ポンパ・キルケンシス」の不死の神々のなかに列せられた。彼の像はキリヌスの寺院に建てられ、その台座に「不敗の神へ」という文字が刻まれた。彼を讃えてルベルキに学校が建てられ、彼の神性に仕えるために特別な僧侶が任命された。

シーザーの殺害は彼の野心的な計画を突然終らせたが、しかし彼の後継者がそれを成就した。こうして皇帝の周辺に神の後光が輝くこととなった。彼らは彼のために祭壇を建て、彼に宗教的な尊崇を

捧げた。ローマ国家最高の保護神であるカピトリン丘のジュピターに、自ら成上ろうという野心をもったカリギュラは、帝王の神性を次のような言葉で主張した。「羊や牛を飼う人間が羊や牛ではなくて、それに優つたものであるように、人民の上に君臨する支配者たる者は、他のもののような人間ではなくて神である。」

ローマ人は彼らの軍隊の指揮官が東方世界やギリシャで神様扱いされるのに反対はしなかったが、最初はローマの市民に対して神格をもつて臨むことに抗議していた。だが社会的な没落期におけるギリシャ人のように、彼らも直ちに膝を屈し、臆病な自己卑下に完全に陥ち込んだ。数々の詩人や芸術家がローマ全土に涉って、「聖なる帝王」の讃辞を唱えただけでなく、人民や元老院議員もまた、へつらいの卑下や卑しい奴隷根性のとりこになった。ヴァーギルは『アエネーイス』のなかで、オーガスティヌス皇帝を奴隸的な態度で讃え、他の伝説作者は彼の例にならった。コンスタンティヌス帝時代のローマの天文学者、フィルミクス・マテルヌスは彼の著のなかで言った。「帝王のみが星に依存しない。彼は全世界の主であり、彼はそれを最高神の敕命によって導くのである。彼自身は神のうちに列している。至上の神が彼に生起するすべての事柄の遂行と完成を命じ給うたのである。」

ビザンティウム王朝の皇帝に捧げられた神聖な榮譽は、今日ですら「ビザンティウム式」という言葉の意味に残っている。ビザンティウムで皇帝に捧げられた宗教的榮譽は、叩頭において最高潮に達した。それは古い東洋の慣習で、一般人に平伏し地面に額をつけることを要求した。

ローマ帝国は廢墟となって滅んだ。何世紀もの間、何百万の臣民

の人間としての尊厳をふみにじった支配者たちの誇大妄想、すべての人民に対する怖しい搾取、そして帝国全体に及ぶ腐敗の増大は、人間を精神的に参らせ、彼らの社会意識を殺し、彼らからあらゆる抵抗力を奪い取った。このようにして長い間に、彼らはいわゆる「野蛮人」の攻撃に抵抗できなくなっていた。「野蛮人」は各方面から強大な彼らの領土を襲ったのである。しかしシュレーゲルが呼んだ「ローマ精神」は生き残った。それは東ローマ帝国滅亡後も、帝王・教皇政治主義が生き残ったのと同じである。それは次第にゲルマン民族の粗暴な若い力を刺戟し、彼らの軍事指揮官は帝王の運命的な遺産を引継いだ。またローマは教会のうちに生き延びた。教会は教皇政治の形をとって、帝王政治主義を最高の完成された権力にまで発展させ、一貫した精力をもって、全人類を巨大な群羊にしてしまい、ローマの最高権力の下にそれを強行しようという目的を追求した。

ドイツ皇帝という観念のうちに含まれている政治的統一を目指すその後の努力も、またローマ精神に鼓舞されている。ハプスブルグ王朝、シャルル五世、フィリップ二世の強大な帝国、あるいはブルボン王朝、スチュアート王朝、ロシアのツァーの王統もみな同じである。支配者個人はもはや神として直接には尊敬されなかったが、彼は「神の恩寵によって」王となったのであり、臣民の無言の尊崇を受けていた。臣民は彼を一段とすぐれた階級のものと考えていた。国家の概念が幾度も変化したように、神の概念も時とともに変化した。しかしすべての宗教の深奥の性格はいぜんとして不変であり、すべての政治の核心もまた決して変っていない。それは地上と天上の権威の所有者が、人間を拘束する権力の原理であり、つねに

大衆に服従を強いる宗教的な依存感情である。国家の首長はもはや公共の殿堂で神として礼拝はされない。けれども彼はルイ十四世とともに「朕は国家なり」というのである。そして国家は人間を監視し、彼が法の定めるところから逸脱しないよう、その歩調をととのえる地上の絶対者である。それ故国家権力の統治者は神への尊崇がその表現を宗教に見出すように、その表現を政治のうちに見出す権力の高僧にすぎないのである。

僧侶は人間と、彼がそれに頼ろうとし、従って彼にとって運命であるより高い力との間の媒介者であるが、宗教は僧侶の發明であるというヴォルネーの論点は、的をはるかに外れている。なぜなら僧侶階級のできるずっと以前から、宗教的な観念はあったのである。また僧侶自身が彼の分別の正しさを本来は確信していた、と仮定しても大丈夫である。しかし次第に彼の同胞の盲目な信仰や暗い恐怖が、無制限な権力を彼の手に握らせ、それから多くの利益があがるにつれて、彼はこれらについて考え始めた。その結果、僧侶のうちに権力意識が芽生え、それとともに権力欲が起った。それは僧侶気質として引続き発達し、ついに社会における一つの独立した階級になった。権力欲から「権力への意志」が発達し、僧侶気質の特色にまで進化した。この力に押されて彼らは信者の宗教的感情を一定の方向に統制し、信者が彼らの権力欲に役立つよう、信者の信仰の衝動を形にはめこもうと試みた。

すべての権力は最初は僧侶の権力であった。今日でもその深奥の本質は変っていない。古代史は一人で僧侶と立法者と支配者の役を兼ね備えた、多くの人のいたことを示している。無数の王侯の称号の由来を尋ねると、それがかつては僧職の名であったことが明らか

にされるが、このことは宗教的権力と現世的権力の起源が共通であることを意味している。アレキサンダー・ウラーはその優れた著述『政治学』のなかで、実に適切なことを書いている。すなわち教皇政治は決して現世の政治にならうようなことはなかったが、すべての現世の支配者はつねに教皇の政治をやろうとしていた、と。これはまたすべての政府制度がその形体の相違を問わず、ある一種の根柢的な神政的性格を帯びている理由でもある。

教会は絶えずその権力の限界を拡大し、人間の心のなかに依存感情を深く植えつけようと努めていた。しかし現世的権力もまた同じ欲望によって鼓舞されていた。それ故の場合でも、その努力は同じ方向を向いていた。宗教において神が一切で、人間が皆無であるように、政治においては、国家が一切で人民が皆無であった。天上と地上の権威の二つの金言「私は主であり、汝の神である!」、「權威に服従せよ!」は、同じ源から発し、タイの双生児のように結びついている。

人間が神を完全なるものの縮図として尊崇することを知ることによって、それだけ深く彼——神の眞の創造者——は惨めなみみず、地上の無力と弱さの生きながらの化身に成下る。神学者や法学者は飽きることなく、人間が「罪を心に抱く罪人」であり、ただ神の命による啓示とそれへの厳格な服従によってのみ、永遠の劫罰から救われると説教する。かつての臣民、そして今日の市民が国家を全く完全なものとみなす時、彼は自ら無気力な子供のような操り人形に墮してしまふ。法律家や国家神学者は人間が心の中に生れながらの犯罪者という邪悪な衝動を持ち、それに悩まされるが、それは国家の法律によって公けに定められた有徳の道を歩むことによって取除かれ

る、という恥すべき信条を始終提唱している。原罪の教義は根本的にはすべての大宗教の体系だけではなく、また国家理論のうちにも見出される。完全な人間の墮落と、彼自身の性質の無価値と罪への盲目な信仰とは、すべての精神的な、現世的な権力にとって、もっとも強固な基盤である。神の「汝なすなかれ!」と政府の「汝なすべし!」は、互いに完全に補い合っている。神の命と法律はたんに同じ觀念の異なった表現でしかない。

現世的な権力が宗教と手を切ることでできなかった理由はここにある。宗教こそ権力の基本前提なのである。国家の支配者が政治的な理由から、ある種の宗教体系に反対する場合、彼らに都合のよい別の信仰体系を採用することはつねに容易である。信仰をもたないいわゆる「啓蒙君主」ですら、その例外ではない。プロイセンのフリードリヒ二世は彼の王国では「何人も彼自身の流儀に従って救われる」と言明したが、もちろん彼はどのような救いも彼自身の権力と衝突するようなことはあるまいと考えたに違いない。もし彼の臣民あるいはその一部の者がドウハボル教徒がロシアでやったように、王の尊厳を低めたり、彼の法律を無視することによってのみ救われると考えたなら、フリードリヒ大王の喧伝された寛容もかなり違った性質となったであろう。

青年砲兵士官当時のナポレオン一世は、神学を「あらゆる迷信と混乱の下水溜」と呼び、「人民は教義問答の代りに幾何学の教科書を与えられるべきだ」と主張していたが、フランス皇帝になってから、急に彼の見解は変化した。そればかりではない。彼の告白によると、彼は長い間教皇の助けをえて、世界支配を成し遂げようという考えをもてあそび、宗教なくして国家が存続しうるかどうかを疑

つてさえたという。そして彼は自分でその疑いに答えている。

「社会は財産の平等がなくしては存立しえず、不平等は宗教なくしてはありえない。隣りに物持ちがいるのに、飢えて死にかかっている者は、次のように呼びかける力がなければ、到底その状態に甘んずることはできない。すなわち『地上に富めるものと貧しきものがあり、しかも永遠にその差異の続くことは、神の意志である』と。」この主張の破廉恥な率直さは、彼自身は何も信じないが、しかし人類の宗教意識に根ざさない権力は長続きしないことを十分理解するほど賢い男の確信に溢れている。

けれども宗教と政治の密接な関係は、国家のフェティシズム時代、つまり公共の権力がその最高の表現を絶対王制の人格のうちに見出している時代に限定されない。立憲国家の近代の法律において、この関係が一変したと思うのはひどい幻想であろう。後期の宗教体系において、神の觀念がさらに抽象的に、非人格的になっていったように、国家の概念も単独の支配者のうちに人格化される具体的な性格のほとんどを失った。しかし教会と国家の分離が公けに実現されたような諸国でさえ、現世的権力と宗教との内面的関係はほとんど変っていない。もっとも昨今の権力者はしばしば市民の宗教的衝動を一方的に国家に集中し、教会と彼らの権力を分ち合うまいとつとめている。

近代立憲国家のすぐれた先駆者たちは、かつての王制絶対主義の支持者同様に精力的に、政府権力の繁栄にとって宗教が必要であることを力説している。『社会契約論』で絶対主義王制に致命傷を与えたルソーは、実に率直に言明している。

「進化した人民が政道の神聖な根本を尊び、国家の法の基本原理

に従うことを学ぶためには、その影響の有効であることが必要である。憲法の結果となるであろう社会精神は、憲法の創造においても指導的な役割を演ずるのである。そして人間は法律が制定される以前から、彼らがこれらの法律を通してなるであろうものにならなくてはならない。しかし立法者は強制したり、押付けたりはできないから、外的な圧迫なしに人間を説得し、押しつけることなく彼らを熱狂させる、より高い權威にすがらなくてはならない。国家の創立者がつねに天に助けを借り、政治的な理由で神を崇んでいた理由はここにある。こうして国家の法と自然の法に服従する人間は、自発的に人間と国家を形作る権力に従い、納得して国家の運命が彼らに課す重荷を担うのである。一般人の知的な洞察を越え、立法官が神の口を籍りて言明し、より高い力への尊崇によって、人智に従わないうような人々を引連れるのは、まさしくこのより高い考慮によるのである。」

ロベスピエールは文字通り師の忠告に従い、エーベルティストやいわゆるアンラージュを死刑台へ送った。なぜなら彼らの反宗教のプロパガンダは全く反教會的で、国家への敬意を低め、その道德的根柢を覆そうとしていたからである。哀れなエーベルティストよ! 彼らは「清廉派」やロベスピエールのジャコバン党教会員と同じように、確固たる信者であった。しかし彼らの熱望する尊崇は、別の方向を向いていた。彼らは国家より高い権力を認めず、それは彼らにとって神聖なものなかもっとも神聖であった。彼らはよき愛国者であり、彼らが「国民」について語る時、彼らは敬虔なカトリック教徒が神について語る時と同じような宗教的情熱に駆られていた。しかし彼らはその国の立法者ではなかった。従ってルソーに

よれば一般人の知的な態度を越え、立法者がその決定を神の命であるかのごとみせかける、あの有名な「より高い考慮」に欠けていた。

もちろんロベスピエールはこの「より高い考慮」を持っていた。

彼は「一にして不可分な共和国」の立法者をもって任じ、無神論を「貴族的な事柄」と呼び、その共鳴者をウィリアム・ピットの雇人と罵った。ちょうど今日ボルシェヴィズムの一派が誠実な人々を脅すために、彼らと一致しない思想をことごとく「反革命」として叩くのと同じことである。混乱の時にこのような称呼は甚しく危険であり、「奴を叩き殺せ、奴は神に不敬をなした」と言うのに等しい。エーベルティストもまた、彼ら以前そして彼ら以後の多くの人々と同じように、このことを学ばなくてはならなかった。彼らは信者であつた。しかし正統派の信者ではなかった。それ故かつて火刑柱が異端者を焼いたように、ギロチンが彼らの首をはねた。

より高いものへの信仰を擁護して議会で行った大演説のなかで、ロベスピエールはもとの思想をほとんど発展させなかった。彼はルソーの『社会契約論』に言及し、それを彼常套の長談議で批評した。彼はフランス共和国にとって、国家宗教が必要であると感じ、最高存在者は新しい神となつて彼の政策の分別に口添えし、それに神意の御光を与えれば助かると考えた。

議会はその演説を出版してフランス全土に配布し、それを各国語に翻訳し、恐ろしい無神論の教義に致命的な打撃を与え、世界にフランス人民の真の信仰告白を放送しようと決議した。パリのジャコバンクラブは、急いで特に記念すべき宣言において、最高存在者の崇拜を放送した。その内容はロベスピエールの演説と同じく、全く

宗教意識の構造においてもっとも重要な要素である。ロベスピエールが殿堂から「理性の女神」を追放し、「最高存在者」の礼拝に置き代え、「一にして不可分な共和国」のために必要な聖なる後光を作り出した時、それはただ政治的な理由に基づいていた。

最近の歴史はまたこの種のもっとも典型的な例を示している。われわれはムッソリーニとカトリック教会の協定を考へてみる必要がある。ロベスピエールは神の存在を決して否定しなかった。ルソーも同様であつた。だがムッソリーニは無神論者たることを公言し、すべての宗教的信仰の断乎とした反対者であつた。ファシズムはイタリアのブルジョアジーの反僧侶的伝統に忠実に、最初は教会への決定的な反対者として登場した。しかし聡明な国家神学者としてムッソリーニは、彼の権力はもし彼がそれを人民の依存感情に結びつけ、その外面に宗教的性格を与えることに成功すれば、永続きしうるであろうと考えた。この動機から彼は極端な国家主義を新しい宗教にしてしまい、その利己的な排外性と他の人間集団からの暴力的な隔離とによって、ファシスト国家とその予言者である「統帥」以上に高い理想を許さなかった。

ロベスピエールのように、ムッソリーニも彼の教義に伝統が欠けていること、彼の若い権力が印象的でないことを感じた。これが彼を用心深くさせた。イタリアにおける国家的伝統は教会を悦ばない。教皇が国家統一のもっとも危険な敵の一人であり、それがヴァチカンとの公然の闘争の後に成就されたことは決して忘れられていない。しかしイタリアの国家統一を実現した統一運動の人々は、反宗教的な狂信者ではなかった。彼らの政策は反僧侶的であつたが、それはヴァチカンの態度のためであつた。彼らは無神論者ではな

ルソーの思想に基づいている。それは『社会契約論』第四巻の一節に、特別な味を添えている。その一節は次のように書かれてある。

「従つてそこには純粹に市民的な信仰告白があり、その条文の設定は国家の長にとつて、特に重大である。その導きなくしてはよき市民とも、誠実な臣民ともなりえない宗教的教義、あるいは普遍的見解については問題はない。人々に信仰を強制することなしに、国家は信じないものを、無信仰者としてではなく、社会契約を犯し、全心をもちて法律と正義を愛せない、彼の生命を義務のために犠牲にすることが必要な時ですら、そうなしえない者として彼らを罰することが出来る。もし市民的な信仰箇条が受容られた後に、異端者と自称するものがいたら、彼は死刑に備へる。なぜなら彼はすべての犯罪のうちで最大のものを犯したのであるから。彼は自覺的に法に向かつて偽証したのである。」

出来上つたばかりのフランス共和国は、まだ十分に権力を確立しておらず、伝統もなかった。それは深く根を張つた制度がな大多數の人民のうちに生きている過去の支配体系の掃蕩をまつて、新しく生まれてくるものである。それ故日のまだ浅い共和国の権力を、人民の宗教意識のうちに確立することは、他の諸国以上に彼らにとつて急務であつた。共和国の権力者たちが国家に神聖な性質を与え、フランスを荒々しい熱狂に巻き込んだ新しい宗教にまで「国民」の崇拜をたかめたことは事実である。しかしそれはそのすさまじい旋風をもって、旧世界を閉めだした大革命の熱狂のさなかに起つたことであつた。この興奮は長続きはしない。やがて冷静になるにつれて、批判的な考察の頭をもちあげてくる時が予想される。なぜならこの新しい宗教にはあるもの——伝統が欠けていた。それは

つた。彼の追想記の序文に「僧侶は嘘の人格化である。そして嘘つきは泥棒であり、泥棒は人殺しである。私はまだ別の恐ろしい僧侶の属性を証すことができる」と書いて僧侶を猛烈に憎んだガリバルディでさえ、その国家主義者としての努力によって、深く宗教的な人間であることを示しただけでなく、彼の人生観のすべては神への信仰に根ざしていた。一八六七年ジュネーブでの「平和と自由同盟」の大会に提出された、彼の起草になる十二条の議案の第七条は次のようになっている。「会議は神の宗教を採択し、会員はそれを各地に拡めることを義務とする。」

青年イタリアの党首で、ガリバルディに次いで国家統一運動の大立物であつたマッツイーニは、心の底までもっとも深い宗教的信仰が滲み込んでいた。彼の哲学にはすべて宗教的な倫理と、民主的な外観にも拘わらず、全く専制的な性質の国家的、政治的熱望とが奇妙に混り合っている。彼のスローガン「神と人民」は彼の目的の特徴をはつきり謳っている。なぜなら国家は彼にとつて宗教的概念であり、彼はそれを政治的教会の枠のなかに閉じ込めようと努めたのである。

けれどもムッソリーニや彼に従う多くのイタリア・ファシズムの指導者は、こういう羨しい状況にはいなかった。彼らは教会だけでなく、このような宗教に徹底して反対した。だがその立場は非常に重荷であつた。とくにその国の首府が何百年に渉つて強力な教会の中心地であり、意のままに動く何万の手先をもつ教会が、ファシスト国家の幹部の悪業をつねに人民に思い出させようと働きかける場合、それは重荷であつた。それ故この力と了解をつけることが望ましかつた。一八七〇年九月十二日ヴィクトル・エマヌエルの軍隊が

ローマに進出し、教皇国家の現世的権力を取上げて以来、ヴァチカンとイタリア国家は対立しているのだ、それは容易にはできなかった。しかしムッソリーニは若干の譲歩を用意していた。ヴァチカンとの平和を購うために、小規模ではあったが教皇国家を再建した。彼は彼の前任者の一人になされた不正に対して、教皇に財政的に弁償した。また彼はカトリック教会を国家宗教として認め、公立教育制度のかんりの部分を僧侶に譲った。

ムッソリーニがこの方向に動いたのは、たしかに宗教的なあるいは道徳的な理由からではなく、冷静な政治権力上の考慮のためであった。彼は彼の帝国主義的な計画に道徳的な支持を必要としたが、とくに諸国が彼に対しても疑惑を改善したいと考えた。その結果彼は今まで時代の風雪に耐え、ある場合には彼にとって非常に危険となる、強力な世界的組織をもつ権力と協定することを求めた。彼が最上の取引をしたかどうかは、ここでは問題にならない。しかしヴァチカンの門を開き、「教皇の幽囚」に終止符を打ったのが、ほかならぬ「全能の統帥」であったという事実は、歴史上の醜怪事の一つであり、ムッソリーニの名を他のなにもまして永く留めることとなる。ファシズムですらついに、ひまし油や暗殺、大量虐殺で権力を永続させることのできないことを認めたのである。もちろんこれらの手段はファシスト国家にとってその国内政策上必要ではあるが。その揚句ムッソリーニはイタリア人民がそこから再生し、「ローマが三度世界の心臓となる」「ファシストの奇跡」の時代を忘れてしまった。彼は数千年の伝統のうちにひそかな力を貯え、それ故に絶滅することの難しい勢力との協定を求めた。

ドイツで勝利を占めたファシズムの指導者は、ムッソリーニの融

通性も賢明な洞察もたず、現実を愚しくも無視して、人民の全生活は彼らの貧血的理論の一時の流行で変化するものと信じていた。だがヒトラーや彼の知的な助言者たちは、いわゆる「全体主義国家」が永続するためには、大衆の伝統のうちに根を張らなくてはならないことを認めていた。しかし彼らが伝統と呼ぶものは、一部分は彼らの病的な想像の所産であり、一部分は何世紀もの間人民の心の中で死んでいる観念であった。神ですら古くなり、死んでしまひ、時代の宗教的必要に即した、別のものと交替しなくてはならないのである。一つ目のヴォータンや黄金の生命のリングを持った愛すべきフレイアは、『二十世紀の神話』をもってしても新しい生命に覚醒させることのできない、長く忘れられた過去の影模様にすぎない。従って新しい「ゲルマンの基盤によるドイツ的キリスト教」の幻影は、おそらく非条理的な恥知らずで馬鹿げたものなのである。

カトリックやプロテスタントの何千の僧侶が教会の画一化に反対したのは、決してヒトラーの暴力的な反動的な性格のためではない。それはこの無茶な方策がどうしても逆行をよぎなくされると考えられたからである。彼らは教会に有害になるに定っている政策に、責任をとるほど愚かではなかった。手に負えない僧侶を強制収容所にほおろぎ込み、血ぬられた六月の日に、ギャングもどきにドイツ・カトリック教会のもつとも有名な代表者の何人かを射殺したことは、第三帝国の支配者にとって利益にはならなかった。彼らは騒擾を鎮めることができず、結局譲歩をよぎなくされた。何百万を擁したドイツ労働運動を特筆するほどの抵抗もなく、一掃することのできたヒトラーは、ここで噛み砕くことのできぬ障害に出合ったの

である。それは国内政策上、彼が蒙った最初の敗北であり、その結果は予測しえない。なぜなら独裁政治にとって、このような後退による打撃は他の政府形体の場合より重大なのである。

ロシア革命の指導者たちはツァーリズムと完全に一体化した、事実一つになっている教会と抗争して、それとの妥協が不可能なことを知った。そこで彼らはそれをなにか別なものと置き代えなくてはならなかった。彼らは集団主義国家を全知にして全能の神とし、レーニンをその予言者とすることによってこの目的をなしとげた。レーニンは全く都合のよい時死に、直ちに偶像化された。彼の肖像は聖像に取って変わり、何百万の人々が聖者の祠へ行く代りに彼の靈廟に巡礼した。

それは全く偶像破壊的であったが、価値ある仕事であった。なぜならそれは正しく主張されているように、その深奥の性質において度し難く宗教的である人間の潜在的な精神性が、自らを主張する時に要請される構造をちゃんと用意しながら、しかも迷信的な層の根柢を明らかにしたのであるから。

現在のソヴェト政府の宗教政策は、事実上フランス革命のエーベールティスト運動の繰返しにすぎない。政府に支援されているロシア無神論者連盟は、ただ教会信仰の古い形式だけに反対し、信仰それ自体には反対していない。実際、ロシアの政府流無神論は、一つの宗教運動である。ただ啓示宗教の権威的、宗教的原理が、政治の分野に移された違いがあるだけである。すべての教会の一致した抗議を呼んでいる有名なロシアの青年の反宗教教育は、実際には国家をすべての宗教活動の中心とする厳格な宗教教育なのである。それは人間の自然な宗教を国家が確立した抽象的な、一定の政治的原則の

ドグマの犠牲にしている。この根柢をかき乱すことは、かつての教会の権威に対する異端者の活動以上に、現代のロシアではタブーになっている。政治的異端者は教皇教会が宗教的異端者を冷遇するのと同じように、ロシアの国家独裁の代表者から暖かく迎えられる。すべての他の宗教のように、ボルシェヴィキ国家の政治宗教は、より高い力への人間の依存を確保し、彼の知的な屈従を維持してゆく努力を続けている。

- (1) Alexander Ular, "Die Politik" Frankfurt a/M. 1906, S. 44.
- (2) Jean Jacques Rousseau, "Le Contrat Social" Book II, Ch. 7.

『自由聯合』『自由聯合新聞』復刻成る

『自由聯合』および『自由聯合新聞』は一九二六年から一九三五年に至る間、アナキズム系の労働組合の全国連合組織である全国労働組合自由聯合会（全国自聯）の機関紙として刊行された。昭和期の労働組織としては評議会、全協、総同盟などが最もよく知られている。全国自聯はもっぱらアナキズム労働運動史のなかでのみ問題とされた観がある。

しかしこのような扱いはきわめて党派的であり、全国自聯の闘いはその分裂や思想団体的な体質にもかかわらず、昭和労働運動史のなかで再評価されるべき質をもっている。こんど海燕書房（東京都千代田区内神田一四一六）から刊行された機関紙の完全な復刻は、この再評価へ向けての決定的な第一歩といつてよいだろう。この復刻は付録として発行された謄写版の『闘ふ農民』まで収めており、きわめて良心的な編集である。（一万二千円）

編集後記

この四月に松尾邦之助が亡くなった。松尾邦之助といっても、若い人たちのなかには知らない人もいるだろう。戦後、シュテイルナーやアン・リネルを改めて紹介し、また辻潤の再生に骨折った「アップランシ」である松尾については野田茂徳が『読書新聞』や『情況』に書いたほか、ほとんどだれも取りあげていない。彼は骨の髄までジャーナリストであった。わが国には珍しい自分のオリジナルな思想をもったジャーナリストであった。

「自由クラブの時代」は、一つには彼の死を悼む心をこめ、いま一つにはすでに三十年近く経った敗戦直後の混沌とした時代の断面を記録にとどめておこうという気持をふくめ、執筆した完成が予想外に手間取り、枚数も当初の予定の倍以上になった

読者にとっては迷惑になったかもしれないが、ぼくにとってなんの制約もなく書けるのはこの雑誌だけだから、寛恕してほしい。

その結果、発行が大幅におくれてしまった。原稿を寄せてくれた筆者の方々や読者にお詫しなくてはならない。この分では今年是一回しか出せそうにない。

◇

秋山清「大杉栄の旅」小感」は和田久太郎、村木源次郎、古田大次郎らの福田大将への報復テロ事件をテーマとしている。稿末の日付を見れば分かるように、この原稿は東アジア反日武装戦線の逮捕事件以前に書かれたのだが、あの事件に対する一つの見解を示すものともなった。「……私はテロリズムの意義、その歴史上の足跡を悲壮化したりする者ではない。むしろテロリズムを否定する。しかしテロル以外に何を為し得るかと思う

心情が万人の胸底から消え去るときがあるか、有るとすればそれは考え得る最終革命の時であればならない」という秋山の言葉の前に、われわれは再三三考するところがなければならぬだろう。老アナキストは健在である。

◇

だが同時に、「テロル以外に何を為し得るかと思う心情」の即自的な表現で「何を為し得るか」そのことを深く問い詰めていかなくってはなるまい。この心情に普遍的な表現を与えていくことがなければ、どのような行為も風化を免れない。

あれもだめ、これもだめの八方塞がりのなかで、ヤケを起こしたり、シラケたりせずに、初心に耐えていくほか、活路は開かれぬのではなからうか。

黒の手帖 第十九号

一九七五年九月一日発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)郵便番号一六二
振替・東京七一〇二四

六五

印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区高田馬場四丁目九番一六号

定価・三〇〇円

送料五五円

二号分前納・七〇〇円

四号分前納・一四〇〇円

(いずれも送料共)